

#### 4. 周辺遺跡出土土器と大湯式土器

##### (1) 研究史に見る大湯式土器の現状

大湯環状列石及びその周辺から出土した土器は一般に大湯式土器と呼ばれ、種々の出版物に紹介されている。しかし、明確な型式設定には至っておらず、その内容も断片的で不明確な部分が多い。

「大湯町環状列石」において、八幡一郎氏は環状列石出土の土器を全体的に後期に位置づけ、このうち磨消縄文手法による帯状文の土器については関東地方の加曾利B式との類似から後期中葉に、また平行沈線による渦巻文の土器や縄文の地文上に沈線による曲線文を有する土器については堀之内式に近いとし、後期初頭を予期した(八幡 1953)。

昭和31年、江坂輝弥氏は角田文衛氏の論文(「陸奥における二、三の薄手式土器」『考古学評論』1-2, 1935)を踏襲し、東北地方の後期の土器について、天狗沢一吉野田一鳴沢一大湯という編年を考え、大湯式土器を後期中葉に位置づけた。氏は吉野田・鳴沢遺跡出土の土器が窺がきの平行沈線による曲線文であるのに対し、大湯遺跡出土のものは磨消縄文による曲線文であることや、器厚が薄手であること、細口壺がみられること等差異をみとめ、「大湯遺跡出土のこの大湯式とも称すべき土器は鳴沢式土器に後続する関東地方の加曾利BⅡ式あたりに併行するものと考えている」としている(江坂 1956)。江坂氏の編年は一時多用されたが、不明確な部分が多かったため、磯崎正彦氏による十腰内編年の発表(磯崎 1964)以降、その影をひそめた。

磯崎氏は後期の土器を十腰内Ⅰ～Ⅴ群に分類し、前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ群の細分の可能性を指摘した。また田村誠一氏は大曲Ⅰ号遺跡の出土土器を第1類から第9類に分類し、中期末葉から後期中葉にかけ、山田野A～C<sub>7</sub>式土器に変遷する(田村 1968)とした。

1970年代には青森県における発掘調査の件数が増え、後期初頭～前葉の資料も増加する。それに伴い、十腰内Ⅰ式土器の細分・再編成が数多く試みられるようになる。鈴木克彦氏は中の平遺跡の資料を用い、十腰内Ⅰ群をa、bに分類、さらに山田野B式に比定できる土器を大曲Ⅰ式とし、大曲Ⅰ式—十腰内Ⅰa式—十腰内Ⅰb式の変遷を考えた(鈴木 1974)。また葛西励氏は螢沢遺跡、木戸口遺跡の調査から、十腰内Ⅰ式土器を第Ⅰ～Ⅲ段階に細分し、第1段階を前十腰内式とした(葛西 1979)。さらに成田滋彦氏は螢沢遺跡出土土器を螢沢式、山田野a、b類を前十腰内Ⅰ式土器とし、螢沢式—前十腰内Ⅰ式—十腰内Ⅰa式—十腰内Ⅰb式の変遷を提起(成田 1981)している。

この間、秋田・岩手県北部では、発掘件数も少なく、良好な資料にも恵まれなかったこともあり、これらの細分案を傍観する立場にあった。しかし、1980年代には東北縦貫自動車道遺跡等の調査が岩手県北部及び秋田県北東部に及び十腰内Ⅰ式の範疇に入れがたい資料も増えてくる。

ここに、大湯式土器の型式設定と細分の必要性が生じてくる。

## (2) 大湯環状列石周辺遺跡出土土器の変遷

遺構外出土土器の項では、土器片もその対象としたため、主に施文技法の点から分類した。ここでは、遺構内出土土器をも含め、一個体土器及び全体を推定できる程度の土器片を対象に文様帯、文様に主眼を置き、大湯環状列石周辺遺跡（第二次）出土土器の変遷を考えたい。

### I 段階（I 群 1 類，2 類，3 a，3 b 類，4 a 類 第105図 1～6）

隆沈文や沈線文により、幾何学文、曲線文の施文される土器類を特徴とする。深鉢・鉢・壺形を呈するものがあり、深鉢形土器が多い。深鉢は波状口縁で、口縁部が外反するもの、口頸部でくびれ、外反した口縁がその上半で若干内彎するものがある。壺は波状か平口縁で、口縁部が短かく、若干広口のものが多い。また胴部最大径を胴部下半にもつ。これは本段階の土器が口縁部から胴下半に及ぶ幅広い文様帯を有することに起因すると考えられる。

文様帯は口縁部、口頸部、胴部文様帯に分離できる。口縁部文様帯には粘土紐貼り付けや隆沈文により「8」字状文や円文を主体とする文様、懸垂状文等が施文される。また口頸部文様帯や胴部文様帯を区画する部分には隆沈文による円文を狭んだ長方形文や直線文が施文されている。胴部文様帯はさらに縦位あるいは横位に区画されるものが多く、横位方向に2分されるものは、その上下に幾何学文、曲線文を主体とする類似する文様が施文される。また縦位方向に細分されるものは、「S」字状文、渦巻文等を挟んだ縦位平行沈線や縦位連結楕円文、「8」字状文等により4区画され、その間を弧状線等により連結するもの、渦巻状等の曲線文が施文されるもの等がある。

本段階の土器の文様は主に隆沈文で施文され、沈線文系の土器もその口縁部文様や胴部文様帯区画には隆沈文を多用している。一般に幅広い胴部文様帯に縦位方向あるいは無方向の文様を展開する土器類ととらえることができる。

### II a 段階（I 群 3 c，3 d，3 e 類，4 b 類 第105図 7～15）

前段階より胴部文様帯が狭まり、胴部上半に限定されつつある。この文様帯幅の縮小に伴い、文様も横位方向へと展開し始める。深鉢，鉢，壺の他に浅鉢，台付土器，蓋などもみられる。深鉢は依然波状口縁を呈するものが多いが、ゆるい波状や山形小突起状となる。また壺の胴部最大径は胴部中央へと移行する。

文様帯は口縁部文様帯と胴部文様帯となり、口縁部には花卉状文や「Y」字状文が施文されるか、長方形文や横位線文となる。胴部文様帯は前段階の縦・横位の区画が薄れ、波状文，階段状文を主体とする文様や三角形文・楕円形文等の幾何学文が横位方向に連結，展開する。

これらの文様は帯状文，2～3条の平行沈線等により施文されるが，帯状文のものが多く。帯状文は2～3条の平行沈線間に縄文を充填する方法が多用される。山形小突起を有する深鉢

口唇部の棒状工具横位圧痕文は、前段階の粘土紐貼付文からの変遷と考えられる。

## Ⅱb 段階（Ⅰ群 4c 類 第105図16～21）

大湯式土器のメルクマールとも言える入組状曲線の発達する時期で、前段階のように主要文様から区画帯に延びた帯状、直線状文がなくなり、全体的にシンプル、流動的になる。深鉢、鉢、浅鉢、台付土器、壺、蓋の他に注口土器もみられ、器種が多様化する。深鉢はゆるい波状口縁か平口縁で、口頸部が若干狭まり、口縁部が外反するものが多い。壺もゆるい波状口縁か平口縁で、細口のものが多くなる。

口縁部文様帯は退化し、帯状文や花卉状文等の装飾文が付加される程度で、壺の口縁部は無文となるものが多い。胴部文様帯は胴部上端と胴部中央の帯状文に区画された胴部上半に限定され、入組状曲線文が施文される。平行沈線による入組状曲線文などもみられるが、帯状文による入組状曲線文のものが圧倒的に多い。波頂部等に花卉状文等が付加されているものもあるが前段階の名残りであろう。

## Ⅱc 段階（Ⅰ群 4d 類 第105図22～24）

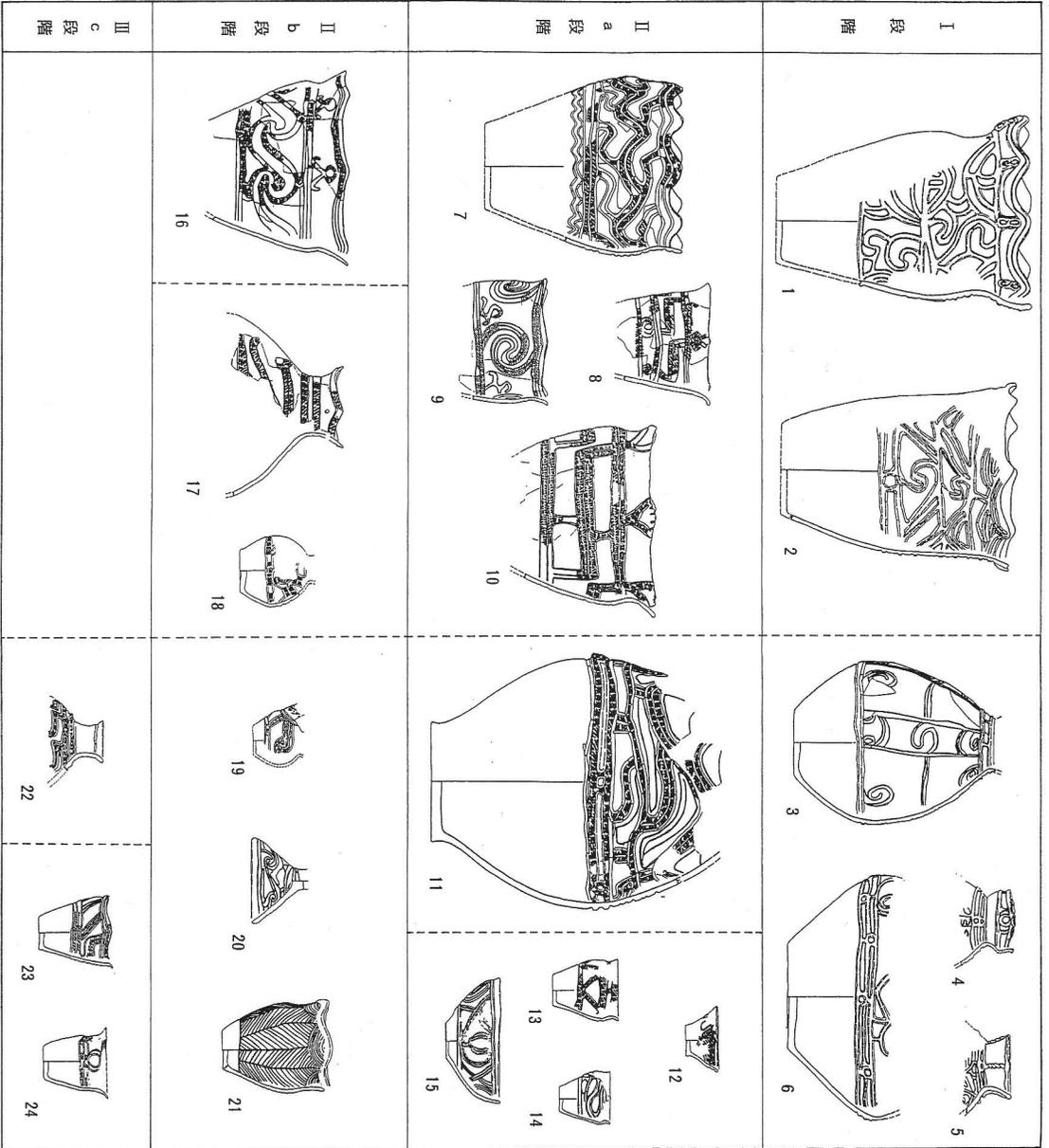
入組状曲線文が退化、簡略化する時期で、文様帯幅はさらに縮小される。出土遺物が少なく、詳細は不明であるが、深鉢、鉢、壺等の器形がみられる。口縁部文様帯には深鉢、鉢等では横位帯状文が施文されるだけで、壺は無文である。胴部上半の幅狭の胴部文様帯には区画帯間を斜状、階段状文で連結した文様を有する。帯状文の施文技法のものが多いが、沈線文のものや多条沈線文のものも現われ、Ⅱ段階の終末の様相を呈する。

Ⅰ段階はやや幅広の胴部文様帯が縦・横位に細分され、文様も縦位や無方向に展開する時期である。文様表出技法も隆沈文や沈線文が多用され、Ⅱ段階とは一線を画す。これに対し、Ⅱ段階は胴部文様帯が胴部上半に限定され、文様は横位方向に展開する。沈線による施文のものもあるが、圧倒的に帯状文（充填縄文）が多くなる。無文の土器（Ⅰ群 5 類）、口頸部に撚紐圧痕文や平行沈線文を有し、胴部にのみ縄文の施文される土器類（Ⅲ群 3a, 3b 類）も本段階に位置づけられる。

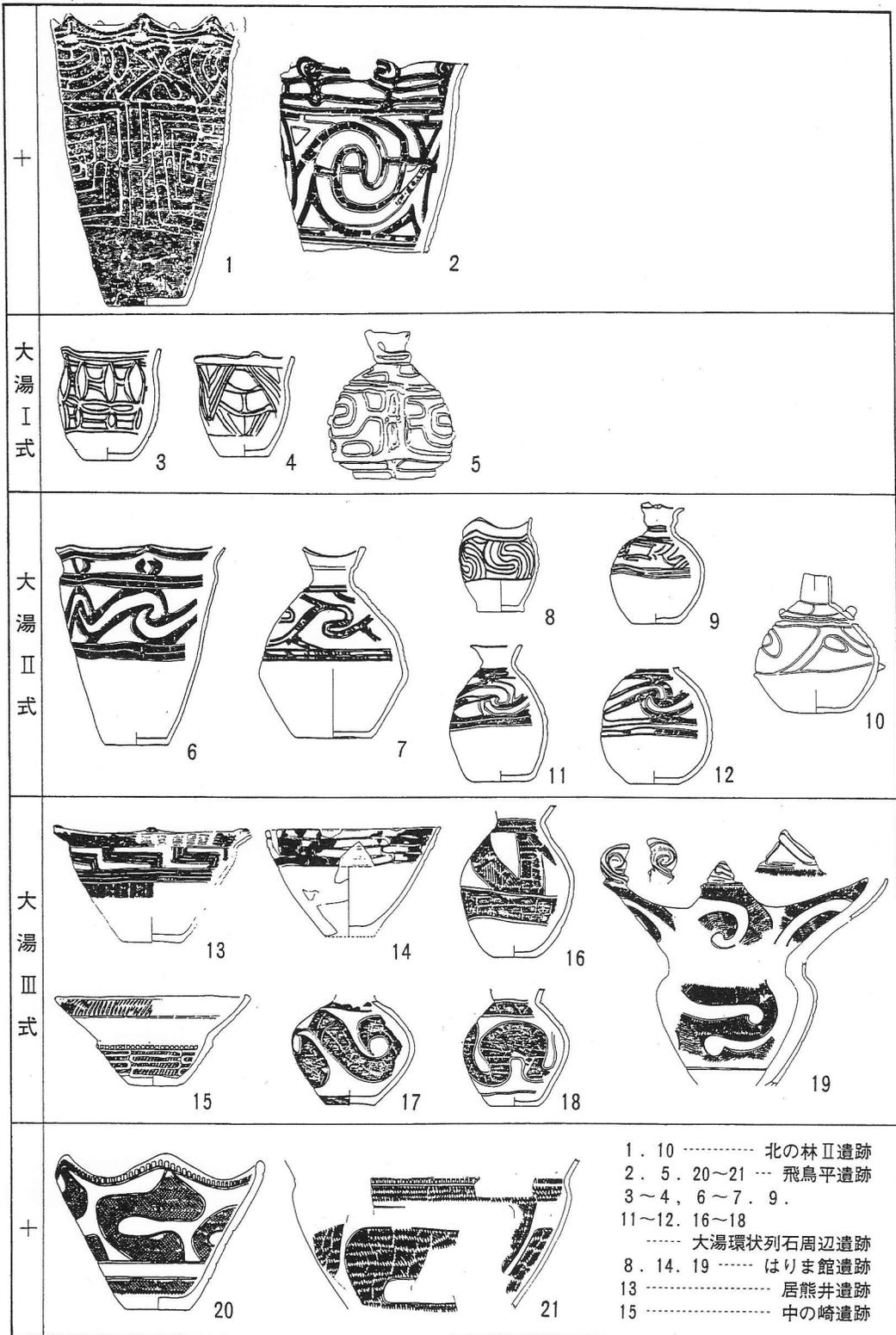
Ⅰ段階は関東地方の堀之内 1 式、青森県の十腰内Ⅰ式前半に、Ⅱ段階は堀之内 2 式、十腰内Ⅰ式後半に併行すると考えられる。大湯環状列石及びその周辺からは、この後期前葉に位置づけられるⅠ段階、Ⅱ段階の土器の他に中葉に位置づけられる土器群の出土がある。この種の土器をとりあえずⅢ段階とし、前述Ⅰ～Ⅲ段階を大湯Ⅰ～Ⅲ式と仮称したい。

限られた資料数であり、層序の把握も十分でなく、時期尚早とは考えたが、大湯式土器の型式設定と細分の必要性から試論を提示した。本項について、資料の蓄積を待ち、再度稿を起したい。

（秋元 信夫）



第108图 後期前葉土器変遷図



第106図 鹿角地方出土の後期前葉～中葉の土器